
BIOHAZARD beSide

maki

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

B I O H A Z A R D b e S i d E

【Nコード】

N 7 7 1 6 0

【作者名】

m a k i

【あらすじ】

基本的には番外編、以前執筆していた作品とは全く関係のない話になるかもしれませんが。シリーズの方でも他のバイオ関連の作品を載っているものでそちらもよろしくお願いします。

奔走少年：世界中が困惑しだす少し前の話、ウィルスに犯された町で奮闘し続ける少年がいた。少年は事件の解決のために奔走するが

……

奔走少年：悲劇（前書き）

しっかり書ければいいのですが……

奔走少年：悲劇

運命というものの残酷さつて本当に理不尽だと私は思っている、どれだけ勉強しても高校や大学、はたまた中学校、いや小学校まで落ちる可能性があるのだ。まあ、その場合は自分以外の人間が自分以上の努力をしていたというのがその明確な理由であり、正直言った話それを誰かのせいにするなんておこがましい、だって完全に自分のせいなのだから。

そういう人間に問う、お前は一時たりとて怠らなかつたか？常に全力で努力し続けたか？きつと答えは……………

「くたばれ」

少年はスコップを振り下ろす、小柄でありながらもその一撃の威力は凄まじいものがあり、少年の正面にいた人間の頭はぱっくりと割れた。ドバツと出血するが少年は一滴たりとて返り血を浴びることなく他の人間をスコップで蹴散らす、遠心力を利用しながら頭部を砕く。それだけ少年の取っている行動は異常な行為であるにも関わらず周囲の人間はどんどん少年に近づいてくるのだ。むしろ第三者の視点から見たら周囲の人間の方が異常に見えることだろう。それくらいに異常であり、異形の光景だった。

「数が多いな」

にも関わらず、その異形な光景の中心にいる少年は至って冷静なのだ。小心者でなくても発狂しそうなこの状況、少年は慌てることなくスコップを人間の頭に振り下ろし続ける。不謹慎なことだが少年はBLUEHEARTSのハンマーを歌っていた。

「たとえ春の雨が降って、僕は部屋で独りぼっち…夏をつげる雨が降って、僕は部屋で独りぼっち…ハンマーが振り下ろされる、僕達の頭の上に、ハンマーが振り下ろされる、世界中至るところで！」

何人目になるのか、少年はまた人間の頭を砕く。本来ならば少年は重罪人として扱われるだろう、だが思い出して欲しい。戦争中はいくら人を殺したところで罪にはならないのだ、たとえ一個人が1000万人殺したとしてもそれが敵の人間だったら英雄として扱われる。戦争が終わるまでなら殺人は許可されるのだ。

少年が置かれている状況はそういう状況、まさしく戦争という状況で今朝から少年にとっての戦争は始まっているのだ。

「しかも理不尽かつ不愉快極まりない」

突破口を開いた少年は一気にそこを駆け抜ける。少年の周囲を囲っていた人間達はゆっくりとしか動けないのか少年を捕まえるどころか触れることすらできない。だがこれは彼らが遅いということもあるが少年が速いということでもあるのだ。

少年は背後から迫る呻き声を気にすることなくその場を走り去る、辺り一面から迫ってくる奇妙な人間の群れは少年に傷一つとして付けることなくフラフラと追いすがらだけだった。

「クソゾンビ共め……」

少年は忌々しそうに吐き捨てた。

事の発端は数時間前、2006年某日の朝方。少年は、いや、たくさん人間が事件の渦中にいた。起床したら家の外には凄まじい数の悪夢がはこびり人を喰い散らしている。少年の両親は母親がその様子を見て発狂してしまったのか父親に噛みつき母親を引き剥がした頃には父親も発狂してしまい、妹が二階から降りてくる様子を察した少年は「発狂した両親を見せられない」と思い手元の包丁で両親の頸動脈を引き裂いた。

「兄貴何してんの……！」

「……」

そのまま妹は部屋に引き返し引き籠もってしまった。少年はそれで良いと思っていた。妹は医者両親をいたく尊敬していた。少年は両親からの期待についていけなくなり、しかも互いにそれぞれ浮気をしていたことも知っていたため両親から心が離れていたからなんの抵抗もなく両親を殺害し得たが妹は違う。もし両親が周りに流されて発狂したなどと知ったら、互いに共喰いまで始めたなんて知ってしまったらそれこそ悪夢だ。妹まで発狂しかねない。妹も両親と同様に少年から距離を置いていたが少年は妹を大事に思っていた、なんだかんだで今となっては唯一血を分けた肉親の一人だし最近では彼氏が出来たらしい。可愛いとか妹相手に思ったことなど無かったがそれでも当然のように兄として妹には幸せになって欲しいと考えていた。

「……やばい」

なんたることかこの家にはほとんど食料がなかった。調味料はたく

さんあるのだがそれだけで生きていけるほどランボーな生活は送れるわけ無い、少年もだし妹もだ。少年は要らないと思いつつもポケットに両親の財布を忍ばせたくさん食料が入るようにリュックサックを背負う、とりあえずこれもないと思いつながら包丁も持つて行くことにしてドアを少しだけ開けて外を覗く。幸いなことに外を彷徨っているゾンビは一人もいなかった。

で、物語は冒頭に戻る。少年は意外に自分が強いことを知りながらようやくスーパーに到着した。

「……いない、のかな？」

物音が何もしない事を確認しながら忍び足で入っていく、どうやらかなりの乱闘があったのか店員や客がばたばたと倒れている。とりあえず水道とガスと電気が通っていることは確認したからインスタント的なモノで何とかなるだろう、手当たり次第にリュックに詰め込んでいく。これ以上入れたら動きに支障が出るというくらいに詰め込むとリュックを背負い直す、ついでに懐中電灯を棚から盗るとこそそスーパーから出て行った。

入れ違いにすごい速度でスーパーに逃げ込んだ女の子がいてその女の子が引き連れてきたのか大量のゾンビがスーパーに押し寄せてきた。少年ははあ、と嘆息しながら中身の詰まったリュックサックを振り回しながらスコップやら鉄パイプを振り下ろし続ける。20体ほどのゾンビを屠ったところでようやく群れが途切れる、体力的に限界が近づいてきた少年はそれでも必死で走り抜ける。止まることなく家まで走りながら息を切らし、時々襲いかかってくるゾンビを蹴散らす。

少年は必死に走って玄関になだれ込む、後ろから大量のゾンビが迫ってくるため急いで鍵を閉めてから少年は肩で息をしながら倒れた。少年はへ口へ口だった、血管のあらゆる所に乳酸が溜まり動いただ

け吐き気を催すくらいだった。少年にはまだやるべき仕事が残されていた。両親の死体を庭先に埋めなければならないのだ。だからスコップを道端で拾ったのである。

「……吐くな、これは」

血まみれのままりビングに放り出されている両親を引きずりながら庭に出す、あまりに凄惨すぎる光景は妹が見たら失神はおろかショック死してしまうかもしれない。それだけは避けなければならない、少年はできるだけ急いで両親の死体を埋める穴を掘り始めた。

「兄貴……」

背後からの声に少年が振り向くと妹がガチガチと歯を鳴らせながら包丁を構えている、少年はなるたけ妹を落ち着かせるように低いトーンで言った。

「襦まち、お父さんとお母さんは病気だったんだ」

「わざわざ病人を殺す必要なんてないでしょ！なんで……なんで！」

歯が鳴っている音が少年の元にも届く、少年は妹を落ち着かせることが不可能に近い所業だと知ったがあくまで落ち着いた姿勢を崩すことなく妹をなだめる。

「襦、何か暴動が起きたとか人がたくさん暴れてるとか食べる病気とかいう情報をニュースとかラジオで聞いていないか？」

「そ、そんなバカなニュースなんてやってないわよ……」

「……？」

少年の頭に真つ当な疑問が浮かぶ。おかしい、これほどの騒ぎが知らされていないなんて……？

「あ、兄貴とお父さんお母さんの仲が悪かったのはわかってたけど、こんな事にするくらい仲が悪かったなら相談くらいしてくれてもよかったじゃない！」

「襦、それまでだ。それ以上大きな声を出すな」

「うるさい！あんななんかもう兄貴じゃ……！」

少年は強引に襦の口を塞ぐ、手のひらを必死で噛みついてくる襦の歯が痛かったが少年はその手を離すことなく耳元で囁いた。

「少し黙れ、お前に構ってやれる時間がない」

暴れている襦の口を塞いだまま襦を二階の部屋まで運ぶ、ドアを閉めて襦が出ないように椅子を立て掛ける。これでよし、少年はそう呟いて下に降りると庭に転がっていた両親の死体がなかった。

「……」

少年は自分の嫌な予感が当たったことを怨めしく思った。どうやら今の自分が置かれている状況はゲームなどでよくある『歩く死者』リビング・オフ・ザ・デッドというやつらしい。

「ということはきっと誰かが背後で糸を引いているはず……かな？」

恐らく敷地内いるであろう両親の死体を目の動きだけで探す、右、左、上下、背後、振り回しづらいスコップを捨てて襦が持っていた包丁を取り上げる。

そう言えばどうやって襦の口を塞げたんだろう？けっこ怖かった

のに襦はどうして自分を刺さなかったんだろう？疑問はどんどん浮かぶが今はそれどころではない、不思議なことに体に震えはなく思考は至って冷静だった。

「見つけた……！」

少年は床を蹴ると僅かに動きのあった台所へ駆ける、転がっていた台座を台所に放り込みながら姿を見せた両親だったゾンビの額に包丁を突き立てる、ゾンビが後ろに倒れ込むと同時に少年はさらに深く包丁を刺し込みながら喉元まで強引に切り裂いた。骨ごと切り裂いたため包丁はポッキリ折れてしまい、完全に使い物にならなくなったためすぐに少年は新しい包丁を棚から取り出した。

「父さんなのかなこれは……母さんも殺さない」と

その時二階へ向かう階段から物音が聞こえた気がした。少年は咄嗟に襦の存在に気付き、もう一本包丁を取り出しながら階段へ急ぐ。母親だったゾンビは二階の部屋の襦の臭いを嗅ぎ付けたのか少年の察した通り階段にいた。

「こつちだよ化け物！」

少年は三本ある包丁のうちの一本を投擲する、後頭部にズガツという汚ない音がすると同時に包丁が突き刺さった。

ゾンビはすぐに少年の方を向く、少年は母親だった死体の不様な姿に哀れみすら覚えてしまった。

ずっと勉強して医者になくなって、その末路がこれか……理不尽な人生だよな、母さん……

「ああ、ああ、あ、っ！！」

口から包丁を押し込む、完全に脳髓を破壊したことを少年は察するがこれは死体だ、死んでも動いているこれが簡単に活動を止めるとは思えない。

少年は頭部を集中的にいたぶる、少年の頭からはこれが母親だったなんて事はどこかへ消え去っていた。

殺さない、殺さない。なんとかして殺さない。

妹だけは、襦だけは守らない。

俺にはもう襦しかいないんだから。

近くにあった椅子を振り上げダンっ！ダンっ！と繰り返し頭部を摺り潰す、もう母親どころかゾンビの面影すら受け取れないくらいに頭部は原型を失っており少年はそれでも椅子を振り上げ続ける。

「兄貴本当になにやってんの……！？」

「……襦」

少年は今持つている椅子は自分が襦が出ていかないようにドアの前に立て掛けていたものだということを完全に忘れていた。一旦襦に視線を移してからゾンビに視線を下ろし、それから襦に視線を戻して少年は至って冷静なまま、襦に言った。

「襦、父さんと母さんを埋める穴を掘る手伝いをしてくれないか？」

状況は最悪だった。襦は信賴していた両親の死体を見たせいによる発狂寸前のパニック状態で、最終的に少年は一人で両親の死体を庭に埋めたのだった。

少年は庭から外を見回す、銃器があれば強行突破も試みれるのだが襦がいる。少年に襦を置いてけぼりにする選択肢はない、ふうと息を吐きながら外を彷徨っているゾンビ達を見つめた。

「いつそ仲間になってしまった方がいいのかもな、うん」

電話も繋がらない、というか誰も出ない。親友であったり親戚だったり町内の範囲は誰も出ず町の外の知り合いには電話が繋がらないのだ。

「誰かが明らかにネットワークをいじくっていて、っていう考えはちよつと突拍子ないかな？うーん……」

少年にはそういう所業が可能な知り合いがたくさんいるためすぐに考えがそつちに向く、ちなみにそういう知り合いとは電話が繋がらない状況、まさに逃げ場もなく最悪の状況だった。

「俺もそろそろ動こうかなあ……」

少年は呟きながらパソコンの電源をつける、と言っても居間にある家族共用のパソコンではなく自分が個人使用のために購入したパソコンであるためかなり使い勝手が少年にとっていいものとなっている。起動速度が異常に早いのが最大の特徴だと言えるだろう、そし

て通常のパソコンから潜れない深い所に潜ることが可能なのだ。

「病気、喰人、奇行、例事……薬品会社？なんだこれ？」

少年が自分で作った検索サイトの一番上に出てきたのは外国の製薬会社のホームページだった。アンブレラ社、けっこう聞く名前だが何を作っているかわからないということでもかなり有名だったはずだ。ひょっとしたら幽霊会社なのでは、という現実味のない噂かはこびるくらいに薄っぺらい会社である。少年はその会社に今回の事件の原因があるかもしれないと思いながらマウスを動かしクリックを繰り返した。

「……ビンゴ」

少年のパソコンはインターネットを開くと勝手にサイトのネットワークを遡ってハッキングをするように作られている、少年のパソコンのデスクトップには恐らくそのアンブレラ社の最深部であるだろう情報がびっしり並んでいた。

「T・ウィルス、高速新陳代謝によるもたらされる肉体の死亡、絶えず発せられる電気信号による死体、胃液分泌の増進、それによって行われる喰人行為……か。これで全部なのかな？」

誰かが流したのだろう、生物兵器のような化け物の情報も完全に載っている。少年は悪魔の如き所業に吐き気を覚えた。

「なんなんだよ人間って……こんなに酷いことまでできるのが人間なのかよ……」

人類がみんな手塚治虫を読めばこんなことわ起こらずに済むのに、

そんなことを思いながら少年は町の外部にいる知り合いにメールを送った。

『アンブレラ社についての黒い噂、そこで制作されているウィルスについての詳しい情報の提供を求む』

「……………相変わらず仕事が早いな」

数分ほどパソコンの前で座っていただけですぐさま返信が来る、メールを開くとこの数分でどうやって入力できたのか分からないくらいにびっしりと書き込まれていた。

「抗体があるのか、ちょっとだけ安心……………造れないかな？ん……………無理だな」

デスクトップと睨み合いながらブツブツと独り言を呟く少年、とにかく明日から当分この状況が続くらしいということがわかっただけでも収穫だろう、少年は呟き終わると時計を確認する。時刻は午後4：00を回っていた、知らず知らずの内にかなりの時間が経過していたらしい。

「……………寝よう」

時間的には早い少年は眠ることにした、疲れ果てていち少年はあっさり寝むりに落ちていく。

「襠……………」

心配そうに妹の名を呼ぶ、当の妹は自分を嫌ってしまっている現実になちよっと凹みながら少年は完全に眠った。

真夜中にふと、何かの気配を感じ取った少年はガバツと起き上がり、咄嗟に側に置いていた包丁を手に取り、耳をすませると気配の正体は庭へと繋がる窓から聞こえる音だった。少年は両親の死体がまた起き上がったのかと思つたが庭は両親を埋めた時と何ら変化してない、どうやら家を囲むように作られているコンクリートの塀の外側から聞こえる音らしい。

ガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリガリ……

「犬や猫が爪を研いでいる時の音に似ている……そういえば動物にも感染するんだっただか」

となると蚊や蠅も危ないのかもしれない。少年は今日行ったデパートにもう一度行く時は殺虫スプレーや武器になりそうなモノをかき集めることに決めた。

⌈
⋮
!
?
⌋

後ろから急に殺氣のようなモノを感じ取った少年はその場に伏せる少年の背後からわずか2、30cm上空を何かの液体が飛び、カーテンにかかる。カーテンや飛沫が飛び散った箇所は肉が焼けるような音を立てながらどろどろと溶けてしまった。

少年は背後の殺氣の正体が自分との距離を縮めてきたことを察知する。後ろを見ないまま前に駆けだしつつ窓の鍵を素早く開けながら庭へと逃れる。薄暗い夜の闇に紛れているが少年は背後から自分を

襲った化け物の正体をおおよそ掴んでいた。

大型、酸性らしき液体、知り合いから送られてきたメールに載っていた化け物の情報と一致する。おそらく巨大な蜘蛛だ、だが正体が分かったところで対抗手段は皆無であるためとりあえず妙案が浮かぶまでは逃げの一手である。庭の物置の前など狭い場所を走り抜けるたびにガラガラと家が崩れていく音が聞こえるがあまり構っていない。生まれた時からずっと住んでいた思い入れがある家だが命の方が大事に決まっている。背後から度々飛んでくる酸に肝を冷やしながら何もなくて何度曲がりながら走る。それだけでもかなり追いつかれる危険は増すのだが地の利はこちらにある、場所が少年の味方だった。

「……あつた！」

何で一般人の家にあるのか分からない巨大なツルハシ、人間の頭に振り下ろしたら一撃で絶命させてしまうことを予測させる禍々しいくらいに凶悪な狂器。ほとんど使われていないのか錆一つとして付いておらず綺麗な銀色をしている。走りながら掴もうとしたがけっこうな重みがあり持ちながら走るのには適さないこと少年は知る、それ以前に少年の足腰は今日だけでもかなり走り回ったせいでもう限界が近づいている、それは少年が一番よく分かっていた。

「……だらあああああ！！！！」

ツルハシの尖った部分を思いっきり背後に向かって振り下ろす、ツルハシそのものの重さも相まって威力自体は充分だったようで少年の背後からドシャッ！という音と獣の断末魔のような奇声が聞こえた。少年はツルハシの重さに耐えきれず勢い余って後方に一回転してしまう、背後にあった大きな何かに乗り上げてその上をころころと転がりながらどさりと芝生の上に少年は転がり落ちた。

「たたた……！」

少年は驚愕した。余裕がない状況だったため一切後ろを振り向かなかったため自分の背後から迫ってきているのが巨大な蜘蛛の化け物であることは分かっていたのだがまさか……

「ここまででかかったのか……」

少年の背後にいた蜘蛛はおおよそ3、4メートルを優に越す大蜘蛛だった。ヒクヒクと明らかに弱っているのがわかるほどに弱々しく痙攣しているがメールの内容からするとT・ウィルスは特定の化け物には高い再生力を与える場合があるらしい、少年は大蜘蛛の脳天に見事に突き刺さっているツルハシを引き抜いてから大きく振り上げ、とどめをさした。

「しかしなんで一般の民家なんかこんな化け物が……？そもそもどうやってここまで辿り着いたのかもわからないし……それに大きな蜘蛛の化け物って誰かが作らないと製造できないって書かれてなかったか？」

製造者が近くにいるとは思えない、少年は蜘蛛の死体にガソリンスタンドから盗ってきたガソリンをぶちまけながら考えたが後から後から疑問が湧いてくるため考えるのが嫌になったため考えるのをやめた。わからないことは後回しにして少年はまず休みたかった。

芝生に燃え移った火が大きくなって危うく火事になりかけたが少年は家に燃え移りそうな火だけを消し止めた。おかげで庭一面が焼け野原のようになってしまったが蜘蛛の化け物を火葬できたからよしとしよう。

奔走少年・狂奏曲（カプリッチオ）（前書き）

ペース的には今後もこのくらいで更新するはずで

奔走少年：狂奏曲（カプリッチオ）

少年の脳裏には2つのことが常にあった、ひとつは襦のこと。もうひとつはあの巨大な蜘蛛の化け物のことである。

「疑問、というより浮かんで当然なものか」

都内、この明らかにおかしい変化が町内に及んだのは今朝からだというのにウイルスによる進化が進んだ生物が出現するのはどう控え目に考えたっておかしいのだ。

「どこかに研究施設でもあるのか……？」

少年の抱いた疑問は至って単純、この付近にあった研究施設のセキユリティが何かに不備があつてそれが原因で今回の事態、バイオハザードが発生したのではないかと推測を立てた。突拍子のない話のように思えるがそれが今のところ最も妥当な考えだろう。

「……近くにあるのかもしれないな、あんな大きな蜘蛛が歩き回っているのを発見できないのがおかしい」

ということは今後も人外のような化け物が出現、もしくは少年自身や襦に牙を剥く可能性が高い。自分個人からなるとかなるかもしれないが襦を守りながらだなんて無理とかいうレベルじゃない。不可能だ。

「……こちらから早めに手を打たないと」

とりあえず少年はデパートやスーパーでヘアスプレーを大量に入手、金属バットなども合わせて盗ってきたため武器には不自由しなさそうだったがどう考えたって飛び道具が不足している。銃器が欲しいとびきり強力で扱えるモノ、少年は思ったがどうせそんなに都合よく手に入るわけがないのだ。そういうモノはきつと自分には扱いきれないだろうし……それに銃器の轟音が響いたら襦に今の状況が知られてしまう。妹を失うことだけは避けたい。

「襦だけは俺が守らないと……」

ある意味この戦場で最も哀れなのが襦と言えるだろう、なににも知らされないまま部屋で自分の世界に閉じこもっている様はこの状況からしても異様だ。襦は両親が少年に殺されたと誤解したままだし外のこともまだ知らないだろう、ラジオやテレビでこのことが放送されていないのもそれに拍車をかけている。

「……それほど大きな会社なのか？アンブレラというのは」

放送や放映を妨げられるほどの権限、そういった人間とパイプがあるのかも知れない。だとしたら個人の力で何とか出来る話じゃないのかもしれない、外部の知り合いにもそれほど権力を持っている人間はいないから仕返しとかは考えられないだろう。まずは生き延びてからだ……

「とにかく郊外はまだ普通の町並みが広がっているってことは確かなのなら……脱出しなきゃいけない」

襦を連れて、部屋の外に出して事実を知らせなきゃいけない。襦が信頼しきっていた両親が町中を徘徊しているゾンビに成り下がっていたことを少年自らが言わなければならない、地獄のようなこの状況を精神状態がボロボロの人間と共に逃走するなんてまるで難易度が高いクソゲーだ。容赦なく襲いかかってくるゾンビを素手で撃退しなければいけないようなものだ。

「とはいえ外部がこの状況を知らされていないってことはきっと今後とも知らせる気はないはず、だとしたら……」

自分ならどうする？これが想定外のミスだったら？どう考えたって揉み消そうとするだろう、当事者達からしたら不測の事態もいいとこだ。何をしても、どれだけ犠牲を払っても失敗という事実そのものをなかったことにしたいはず。

それに対する最善策、少年にとってむなくその悪くなるような光景が目に見えぬ。核を使用しての殺菌を名目とした、恐らく報道においては原子炉がどうか改算され地図の上からひとつの街が消える……それ以外でなら特殊部隊なるものの派遣という手段があるがこちらにはあまりにも有り得ない、送られた資料を見る限りアンブレラが自ら望んでリスクを負う会社だとは思えない。生存者がいたら救うどころか抹殺対象と設定するような会社だ。

「万事休すって言葉がかわいく思えてきた……」

襦は心身共に衰弱している可能性が高い、無理をして動かしたら……

…元々体の弱い襦のことだ、ゾンビが追いかけてきても疲れたら足を止めてしまっただろう。そのためにはどう考えても付近にあると思われる研究施設を発見しなければならない。

「必ず脱出経路か緊急避難シェルターがあるはず……」

施設の設計者が実験失敗の際に発生するバイオハザードの可能性を無視しているはずがない、そこまで能無しだったらそもそも設計自体任されていないはずだ。

少年はようやく見つけた目標に向けて探索の支度を始めた。

「襦、ちよつとお兄ちゃん外出してくるから部屋に入ったままでいろ」

人の気配はする、窓から逃げるような無謀な行為に走っていないだけ襦はまだ冷静だった。少年はお膳に乗せた昼食をドアの横に置いて、返事のないドアの前を後にして家から出た。

ゾンビの数は明らかに増えている気がした。少年は両親が確実に死んだと思ったのに起き上がったことを思い出した。どうやら何らかの改善策というかゾンビの弱点なり抗体を作るなりしない限りゾンビは増え続けるのだろう、それは少年のような生存者にとって非常に厄介な件だった。

「ちくしょう、動きが早くないのがせもてもの救いか……！」

危うくゾンビの尖った犬歯が少年の頬を掠めかける、ギリギリ触れるか触れないかという間合いでそれをかわした少年は返り血を浴びないようにゾンビの額に大振りな鉈を突き立てた。ゾンビは派手に出血しながらアスファルトの上に大の字に倒れながら周囲に血液を撒き散らす、それらを一切浴びることなく少年は走った。

「施設を隠せそうな場所と言ったら山奥に大きな家の地下、他には……片っ端から探せばいつかは見つかるか」

時々見かける犬のゾンビが厄介だったがなんとなく少年はゾンビを相手取る際のコツをマスターし始めていた、返り血を浴びないように一定の距離を保ちながらゾンビがこちらに襲いかかってくるより一瞬早く、こちらの間合いに侵入してきた直後に急所を的確に切り裂く。武道の達人であっても完全に修得しきれないであろう高度なカウンターの技術を少年は齢１７にして既に手中に収めていた。

「それにしても……数が多すぎる！」

後から後から出現して自分に襲いかかってくるゾンビに少年もさすがに嫌気がさしてきた。これだけゾンビが多いという事実は生存者がいないという絶望的な現実に直結する、少年の脳裏に大して仲のよくなかったクラスメートの顔や心を許していた親友の顔が浮かんだが少年は感傷に浸ることなく走った。

度々建物に侵入してはゾンビに注意しながら内部を調べて次の建物へ、延々とその作業を繰り返しているうちに空が暗くなり始めてきた。

「……帰るか」

暗闇に答えはない、少年はそう呟き残念そうな表情をしながら来た道を引き返し始めたのだった。

「襦、今帰ったよ」

ドアの前で襦に声をかける、ドアの前には空になったお膳が置かれていた。少年は少しだけホッとしてお膳を台所まで持っていった。

奔走少年・狂奏曲（カプリッチオ）（後書き）

優しいお兄さんに憧れているので主人公をこんな感じに仕上げてみました。

奔走少年：戦闘競奏曲（パトレ・カンタービレ）

少年の疑問、というより不安は的中していた。町の中心から外れの廃工場まで内部を確認したが地下施設なる研究室は存在しなかった。それどころかこの町からの脱出は不可能であることがわかった、この町から出るための全ての道路や橋といった交通の弁は人が通れないように破壊されていた。

「自分達は高見の見物を決めこもって算段かよ……ちくしょう！」

少年は悔しげに乗り捨てられたのか運転手が発症したかで捨てられていた車のドアを全力で蹴っ飛ばす、それで現実に変化は及ばないということわ分かりきっていたがやらすにはいられなかった。

「脱出機関、か……」

状況は最悪を通り越していた、丸腰で全裸で大人の熊と戦って勝利しろというくらいに無理不可能な事態に陥っていた。

「誰がどうしろと言っているんだ……」

少年は呟く、地下にそういった施設がありそうな所を探し、なさそうな所も探した。大学、スーパー、民家に空き家……はたまた山奥。少年は一週間以上進展のない状況に苛立っていた。

「なんだってんだ……」

少年はやはり悔しげに呟いた。

このままでは負ける、守るべき者を守れずに、いつかは力尽きて負ける。ゾンビの食い物にされていつしか襦も……

少年は電池が切れかけているi-Podの電源を入れた。シャッフルで出た曲を聞いてから一旦家に戻って充電しようと思った、もうそろそろ電気の流通もなくなるだろう。

チエルノブイリ：THE BLUE HEARTS 作詞作曲・真島昌利

誰かが線を引きやがる 騒ぎのドサクサにまぎれ
誰かが俺を見張ってる 遠い空の彼方から
チエルノブイリには行きたくねえ あの子を抱きしめていたい
どこへ行っても同じ事なのか？

（中略）

まあいい地球は誰のもの？
砕け散る風は誰のもの？
吹き付ける風は誰のもの？
美しい朝は誰のもの？

「……行くか」

少しだけ元気になれた気がした。負けちゃいけない、個人の力で何か出来ると思うほど少年は自惚れてはいないがそれでも僅かな人数のために大多数の人間が被害を被るだなんてコトはあってはならな

い。

少年の足取りは少しだけ軽くなって自宅へと長い道を歩いていった。途中で運転が簡単そうな原付を発見してそれを使った。足があると便利だと思った。

「襦……？」

少年はしまったと思った、襦が家の庭に出ている。今まで襦が部屋から出てこなかっただけでこれからも出てこないと思ってしまった自分を殴りたくなった。

「兄貴……これってどうなってるの？」

襦はフラフラだった。その両足はしっかりと地面を掴んでいるにも関わらず襦はフラついていた。

足下にはスコップ、掘り返された焼けた土、そして掘り返された両親の変わり果てた死体。

「襦、落ち着け」

「落ち着けるわけないよ……さっき外に出たら意味のわからない怖い顔をした人に襲われそうになった……それと最近の兄貴の不審な

行動が気になつて庭を掘り返したら……パパとママの死体が怖い顔をした人みたいになつてた」

「……」

腐り落ちた顔を纏つていた贅肉、信頼し尊敬していた両親がゾンビに成り下がってしまったている事実、襤の精神はかなりグラついていた。

「そう言えばパパもママもおかしかった、兄貴に殴り殺されるときも悲鳴っぽい声すら上げなかったもんね。正気を失っていたら全部説明がつく」

襤はゴホゴホと咳き込む、元から体の弱い襤にとって庭を掘り返すという作業はかなり負担のかかる作業だったのだろう。それでも襤は少年を正面からじっと見つめて一切視線を逸らそうとはしなかった。

「話して、兄貴の知ってることを全部」

「襤……」

「大変なんでしょう？ だったら人数は多い方がいいじゃない。今の私はこんな状況だけど……もう少ししたら体調も整うはず。だから」

襤はおぼつかない足取りで少年の下に歩み寄る、少年は自分の妹がこんなに遅しくなっていたことを初めて知った。

「私も知りたい、私達が置かれている状況について」

「……生半可な覚悟だったら死ぬぞ」

少年はわざと真剣な面持ちで自分の妹に言った。

奔走少年：第四楽章（フォースタイトル）

襦が言うには両親には少年には知らない側面があったらしい、二人だけでヒソヒソと話していて襦が来たらパツと話を止めることも多く襦は「まさか自分は本当はこの家の子じゃないんじゃないか」などとバカな妄想に頭をくゆらせていたのだが襦が言いたのは決してそういうことではないのだ。

「町中のどこを探してもなかったんでしょう？研究施設的なそういうの……」

「ああ、だからあとは手当たり次第に地面とかをしらみつぶしに地下探してコトになるだろうな」

「……ひよつとしたら」

「？何がひよつとしたらなんだ？」

「すごく小さい確率、低くて低くて、米粒までにしか満たないくらいに小さい可能性だけで私はその場所を知っているかも知れない」

少年は驚愕する、今までこの最悪な事件が降って湧いてから全く外に出るなどの情報不足もいいところな状況にあった襦が自信ありげに言う様はかなり意外だった。

「あくまでも可能性だけど……」

襦の推測した場所、そこを兄妹は探す。繋がっている場所、脱出経路へと繋がる希望。笑うなら笑うがいいと言わんばかりになって二

人は自分達の家の中で捜し回っていた。

よくよく考えたら両親の行動はおかしいところが多かったと襦は言う、なんだか常にコソコソとしていてその上さっきまで家にいなかったはずなのにいつの間にか家にいたりいなかったり……襦が二人しかない時に居間へと降りるところぞって何かを隠すような動作を見せていたという。まあ、観察力のある襦だからこそ気づけたのかも知れないが、だとしたらここ以外に目的の場所はない。

「……あつた」

「こんな大きい筆筥を置いた、ってだけで誤魔化され続けてきたわけか俺らは……」

「私だつて両親と仲良くしてたのにこんなに大きなコト全く気づかなかったわよ、隠し上手というか私たちがバカなのか……」

「たぶん両方だな、悔しいが両親がこの近辺をこんなことにした張本人だつてことは間違いないんだろうな」

「……それにしても地下に部屋があつたなんて」

倒された筆筥に隠されていた部分にはドアがあり、それを開けると地下へと続く長い階段がありの先にはただ真っ暗なだけの道が続いていた。少年にはその階段が巨大な怪物が口を開けて獲物を待ち構えているようにも見えた。襦も似たような思いを抱いていたが二人は決して口には出さなかった。

口に出したら弱気になって、何もかもが頓挫してしまうような気がして二人は何も喋れなかった。

「もう行くか？ここに部屋があるって分かった以上別に焦る必要はないと思うが」

「……でも武器らしいものは精々ツルハシとかくらいでしょ？あと

は可燃性スプレーとライターで即席の火炎放射器くらいだし別に躊躇する必要はないんじゃないかな？」

それとも兄貴怖いのか？ 襦が無意味に挑発するように言ったのを目の当たりにして少年は少しだけむっとしたが確かに自分に臆病な面があったことは否めない。少年ははんつと自嘲的に笑った。

「逃げ回ってばかりですっかり逃げ腰が地についてちゃったなあ……」

「言い訳？ 兄貴が臆病だなんていつものことじゃない。お父さんからもお母さんから逃げたじゃん」

「逃げてた、か。案外そうなのかもな。ちよっときつく言われただけで突っかかることさえしなくなったもん……」

少年は小さく笑いながら階段を下り始めた。

「あつ！ ちよっと待ってよ！ 一人で行く気！？」

「怖いんならついてくるこたねえよ。別に俺一人の方がたぶん楽に動けるからな」

「ああ！ それって私が足手まといっでこと！？」

「分かってるんじゃないじゃねえか」

襦はむくれながら少年のあとを走ってついてくる。少年はつい数日前までだったら絶対にあり得ないであろう光景に、自分が地獄の最中にいるということを忘れて少しだけ笑顔を見せていた。

このあと襲いかかってくる。凄まじいまでに壮絶な地獄が待ち受けているとも知らずに笑っていた。

奔走少年・悲喜劇（狂おしいほどのカタルシスをあなたに）（前書き）

ちょっとグロテスクな描写が多めですので苦手な方はご遠慮ください

奔走少年：悲喜劇（狂おしいほどのカタルシスをあなたに）

真つ暗な階段を降りるとそこは地獄絵図だった。壁には大量の血肉がこびり付き床にはその分のB・O・Wの死体が散乱している、当然の如くまともな形を保っているものは一つとしてない。床に散らばっている死体は全て何分割かはされていた。

「なにかいるみたいだな」

「どうしてそう思うの？」

「見てみるよ、箇所を問わず死体にはほとんど似たような傷がたくさん付いてる。引き裂かれたどうかは知らんが……ほら」

少年は死体の一つを恐れることなく持ち上げて襤の顔に近づける、襤は少年とは違ってかなり顔を遠ざけるようにしながら緑色のゴリラのような化け物の首もと当たりを凝視した。

「……ほんとだ、千切られたみたい」

「たぶん、いる。この先にこいつらをこんなにした規格外の化け物が」

「お父さんとお母さんは、失敗したのかな？その怪物を造り出すことに」

「失敗……というより暴走だろうな、これだけ危なっかしいのに暴走されて殺傷されて、それから感染してゾンビになって蘇った。一番妥当な考えだな」

少年は顔色一つ変えずに言ったが襤は少し顔色が悪い、やはり慣れていないためか恐怖で表情が引きつっていた。

「やっぱり襤は引き返しておくか？俺が先に行って安心かどうか調

べてから来た方が……？」

「……うつん、私も行くよ。兄貴にばかり頼ってたらダメだ。ダメなんだ……」

「そうか、じゃあいくか」

二人は僅かにぼんやりとした灯りに照らされた通路を進んでいった。

「なんだか暗いな……足下気をつけるよ」

「分かってるけど今のところ兄貴の輪郭しか見えない……」

「どっかに電気操作ができる場所があると思うんだが、つけたらつけたでけっこう危ないだろうし」

「何言ってるのよ、このまま真っ暗なままだったらそっちの方が危ないわよ」

「そうだな……よし、脱出経路はあとで探すとして今は何とかしてブレーカーみたいなものを探すことに専念しよう」

二人は手当たり次第にドアを開けて回る、20分程度で地下施設の電気を付けることに成功はしたのだがいろんな部屋に入る度奇妙な姿をした死体に二人はさすがに意気消沈してしまった。

2メートルは優に超えるかき爪をもった人間に近い体をした化け物に床にたくさん散らばっていた緑色のゴリラを一回り大きくして色も真っ赤に染めたような怪物の大量の死体、少年を襲ったものよりも大きい蜘蛛の死体など、それらが全て死んでいた。

「なんだかさすがに俺の足も重くなってきたよ……」

「こんなことが現実で起こりうるなんて……」

極めつきは凄絶だった。メインの研究室^{ラボ}と思われる場所には大量の紙の束と大きな水槽が置かれていたのだがその水槽には水は一滴も入ってなかった。いや、入っていたのかも知れないが大量の血液で真っ赤になっていたため何も分からなくなっていた。

水槽の中には人間のものもあつたがそれ以外にも化け物の手足と思われる肉の塊がフヨフヨと浮かんでは沈んでいる、細かく千切れた肉片は酸素を送り込む機械の発している泡の影響で水中を縦横無尽に巡っていた。

「……何か探すか」
「そうね……」

散乱している紙を拾い集めて調べてみると少年が外にいる知り合いから送られたものほとんど同じものだった。その中には『新作』『断念』『完成間近』などサインペンで殴り書きされているものもあつたが少年にはその字が両親のものであるという確信があつた。

「やっぱりあいつらがこんなことを……」

襦はボーツとしながらもなんとか紙に書いてあることを調べてはいる、だがあの様子だとこれが両親の字とは気づかないだろうし重要な情報を見逃してしまいそうだったため少年は襦に休むように言う。襦はあまり抵抗することなく従った。

『タイラントキング』『リビングデッドデビル』『ハチュリー』『暴君王』『劣等生』『人形』『クインテット』『五重奏』……こんなにたくさん製造して生物兵器にでもして売り出すつもりだったのか？」

少年は必要な資料だけをカバンに仕舞う、あまりにも突拍子のない

資料だとマスコミに公表しても信じてもらえないだろうし……そもそもこの事件自体ほとんど外様の連中は知らないのだから何らかの偽情報を聞かされている可能性が大きい、それ以上の証拠を掴まないといこの事件を広く認知させるに足りないだろう。

「……ん、なんだこりゃ？」

少年が見つけたのは自分と襦の写真がクリップで止められている2つの資料だった、いずれもだいぶ前に撮影されたものであることは一目瞭然なのだが少年はあまりそんなことを気にすることなく自分の写真が添付されている資料を手に取り、目を通した。

Name:M(ここから先は血で汚れていて読めない)

息子の遺伝子をベースにして作製、遺伝子の基は洗濯物に付着していた髪の毛を使用した。

結果的に実験は成功、成長を早めた。息子が10歳だった頃の外見にまでは無事成長、肉体強化のためにT-ウィルスを投与した際に体が耐えきれず血ヘドを吐き散らして意識不明に陥る。危うく暴走を始めそうだったがニュータイプのハンターのテスト対象として使用、死亡。失敗。引き続き妹の襦の方に尽力するとする。

「……妹の襦？」

「呼んだ？」

襤が少年のところに歩み寄る、少年は自分の写真が添付されている資料を襤に渡すと今度は襤の写真が添付されている資料を手にとった。

Na（ここから先はほとんど血で汚れていて読めない、数カ所のみが読可能）

最高傑作じ……今までの……絶対に……今後の市場の……成功……

（上記とは違う日付のようなサインがあるがこれもあまり読めない、斜線を挟んで数字が書かれているようにしか見えない）

失敗……殺され……全部死んでしまってもう全……助け……たくな
い……生きたい（これから後は血で汚れていて読めない、この資料
における読可能な部分は以上である）

「……どうやら予想以上に嫌な展開だなあ、これは」
「あつ、兄貴。これって私たちが探してるやつじゃないかな？」

少年が襤の座り込んでいた所に行くと『緊急脱出用地下列車』の文字が書かれている紙があり、それはこの部屋の状況からすると奇跡的にきれいだった。

「地下3階……東棟？そもそもここは何棟なんだ？」

「分かんない、とりあえずまだ私たちは一階も階段を下りてないし下ってみるのが今のところ一番良い策何じゃないかしら？」

「そうだな……階段を探していればここが何棟かも分かるかも知れないわけだしとりあえずまた歩くか」

二人はそう言って歩き出した。歩き出してから少ししてここが西棟であることを知る、とりあえず地下3階まで降りてから東棟への道を探そうということになり階段を探し続けた。その間、生物には1匹として出会わなかった。

「本当に皆殺しにされたみたいだな……」

「こんなことできる怪物と同じ空間にいるっただけで気分が悪くなってきたよ……不安で堪らないよ、兄貴は怖くないの？」

「怖いに決まってるだろ、なんでそんな分かりきった質問するんだよ」

「だって兄貴汗一つかいてない」

「ん？そう言えばそうだな、けっこう涼しいし冷や汗くらいはかいてもいいものかなとは思っけど」

「話逸らさないで、兄貴だって私の言いたいこと分かってるでしょ？」

「……」

少年は沈黙する、妹の襦がこんなに察しが良いというかここまで洞察力に長けていたとは想像にも及ばなかった。少年はふうと大きく息をつきながら襦の方を向いた。

「とりあえず襦の方から言ってくれよ、あり得ないとは思っが襦と俺の間で考えの食い違いがあったら面倒くさいことになるからな」

「……まだ確信が持てたワケじゃない、なんとなくだし私は兄貴と

はあまり口をきいてなかった時期があつたからその間に兄貴がどんな連中と連んでいたかも知らない。全く予想が付かないけど……兄貴はこういう状況に慣れている気がする」

襦は確信が持てない、自信なさげな様相とは裏腹にはつきりと少年に物を言う。少年は待ちに対してふふつと小さく笑いかけた。

「まあな、多少だがこういう人外に等しい連中と連んではいた。いろんな物を盗んだり偉い輩や芸能人の私生活をおもしろ半分で流出させたり、知り合つた経緯は説明が面倒くさいから言わないけどな」
「……」

「胡散臭いつて顔だな、言っておくけどこの事件の大まかな真相を掴めたのは外にいるそいつらに頼んだからなんだぜ？ここから脱出できたら紹介する、っていかお世話になると思うから仲良くしろよ」

「やだ」

襦は短く言葉を切つて一人で勝手に進んでいく、少年は何だかよく分からない襦の心中を察しようと考えたが男の自分では無理だと分かつたためまた小さく笑いながら襦の後を追いかけることにした。

奥に行けば行くほど濃くなる血の臭い、二人は顔をしかめながら灯りが小さくなつていく通路を歩き続ける。空気もかなり湿気を含んだそれとなり呼吸も困難になつていった。

「肺に水が溜まつてる見たい……」

「安心しろよ、本当に溜まつてたらとつくの昔に死んでるはずだから」

「例えばの話よ、冗談が通じないわね」

「あまり器用じゃないんだよ、人とのコミュニケーションなんざ取れなくても生きてはいけるんだから」

「それじゃあ今後の生活に目を向けている余裕はなさそうね……なにこれ!？」

二人の目の前に入ってきた光景は文字通り血の海だった。地下へと繋がる階段が大量の血液が浸水して通れなくなっていた。まるで大海のようにザブザブと波立っている血液を見ていた襦はその場へたり込んでしまった。

「これは……何なの!？」

「分からん……ただこのルートから東棟に行くのは不可能ってことと地下にはこれほどの血液を持った何かを殺せる何かがいるってことだけだ」

「……!」

襦の絶句は妥当な物だと思える、少年は襦を少し強引に引き起こすと頭をクシャクシャと撫でた。

「安心しろ、とは言わない。だが幸い東棟へ通じる道はまだあるわけだし列車がどうなってるかは分からんがおそらくこれだけの施設だ、地下水の浸水のためにシャットアウトシエルターくらいなら持ち合わせてるだろう」

「……どういうことよ……?」

「まだ希望はある、俺たちはまだ生きていて微かではあるけど可能性がある。ここから脱出できる可能性がな。やれるんならやらなきゃ損だ」

まずは引き返そう、そう言って少年は襠の手を取った。襠はあまり弱いところを見せなくなかった兄に女の子な部分を見られた恥ずかしさのためか少し顔を赤らめた。

「言われなくても分かってるわよ！」

襠は勢いよく立ち上がった。少年はやはり小さく笑った。

奔走少年・悲喜劇（狂おしいほどのカタルシスをあなたに）（後書き）

怖い……書きながら二人の置かれている状況を想像して鳥肌が立ちました

奔走少年：Immortal Flower（不死身の花）

突然だった、少年の足はなんらかの負荷によって強引に止められた。

「……………！！！」

背筋が『ぞわっ！』とした、親しくしていた親友にいきなり絶望というナイフを眼前につきつけられたかのような、少年にとってそれくらいの寒気が少年の中から歩むという手段を強奪した。

「？兄貴、どうしたの？」

襠は気付いていない、少年の極限までの危機状態に何度も置かれたことで研ぎ澄まされた本能でもって、ようやくそれを察せられたのだ。少年は反射的に襠を自分の背後に引き込んだ。

迂濶だった、凄まじい量の死体を目にし続けてきたため思考が明らかに鈍っていたのだと少年は唇を噛む。いくら大量の死体が転がっていたにしても、それは怪物達が全滅したという証拠にならない。

知っていたはずだ、自分の口で襠に伝えたというのに少年はすっかり頭の隅っこにそれを追いやってしまった。

「そこに、いる……………！」

この研究施設内部の魑魅猛靈の如きB・O・Wを独力で葬り去った、規格外中の規格外の存在。生態系の頂点に立っていたはずの人間をいとも簡単に引きずり下ろせるであろう、頂点どころか天空に君臨する絶対王者。

「下がれ……！」

なにがなんだかわからないという表情の襦をさらに背後にやる、持っていた巨大ツルハシを振り上げたが少年は勝てるはずがないことを悟りきってしまった。

わかる、曲がり角の向こう側の『それ』は強いと。まるで軍隊を相手にしなくてはならない、個人で軍隊のような戦力を持ち合わせた化け物。少年はその存在を目にするよりも早く臨戦態勢に完全移行した。

「伏せてろ！」

『何か』は今にも角を曲がってこちらに姿を見せようとしている、少年は視界に入れただけで自分が絶命してしまうのではないかという狂信的な恐怖にとらわれていた。とにかく時間を、最低限逃げる時間を稼ぐだけでもと躍起になっていた。

改造した噴出力と可燃性の高いスプレーと火力最大に設定されたライターを素早く取り出す、襦が兄の突然の豹変に驚いて呆けていると目の前が豪火で覆われた。

「う、うわああああ!!」

少年の視界もほとんどなくなってしまう。だが少年は完全に我を失っている。自分の背後から聞こえる襦の悲鳴も意に介することなく豪火で通路を焦がした。転がっていた死体が灰燼になったのを確認してから少年はスプレーを止めた。

「はあはあはあ……」

「あ、兄貴……なにがいたの？」

「も、もう大丈夫、かな……」

ブスブスと嫌な音を立てながら上がっている煙が二人の視界をまだ覆っている。肉の焼ける嫌な臭いが充満していて襦はうつと息を詰まらせたが少年が気になっているのはもっと別のことだった。

少年の短期間で半強引に研ぎ澄まさせられた本能は一向に全身に鳥肌を立てさせて臨戦態勢を説こうとしない。少年は素早く襦の口に手を当てて黙らせると自らも息を殺して聴覚を鋭利にする。

……ペタ。ペタ。

裸足の足がリノリウムの床を歩いている音が、確かに聞こえた。少年は咄嗟に襦を抱きかかえると背後にある角まで走って襦をそこに下ろした。

「いいか、俺が出てきてもいいと言った時だけここから出る！俺が死んだら隠れて『アレ』をやり過ぐしてからどうにかここから脱出するんだ！」

「う、うん。わかった……」

「絶対だぞ！」

少年は走ってさっきいた場所まで戻る。ペタペタとした裸足の足音は少年の耳にとてもゆっくりに聞こえた。

足が、震えている。

いや、足だけじゃない。震えているのは全身、震えてない部位は存在していない。それでも少年は全身に力みを入れて全身の震えを押さえる。自分の背後には守るべき妹がいるのだ、ここから自分が恐れをなして逃げ出したらどんな仕打ちを受けるのだろうか……それを思うと恐れは少しだけ薄れた。

野性的な本能、少年は僅かな気配のぶれも見逃さないように目を見開きながらツルハシを脇に置いて刃渡り25cmのアーミーナイフをしっかりと握り込んだ。

ペタ……

炎も収まり、煙が徐々に晴れてくる。足音も確実に近づいてきている、少年はアーミーナイフを大口径の拳銃のように堂々と見えない敵に突きつけた。

「来いよ……絶対に死なねえから」

少年の目に煙でぼやけた何かのシルエットが映る、アーミーナイフを握り込む少年の手に力が入って汗が滲んだ。足に力が入る。

「……？」

少年は目の前の光景に目を疑いながら、舌打ちをした。

「やっぱりかよ……！」

少年の目の前に突如現れた足音の持ち主は襠によく似ていた。いや、瓜二つだった。

奔走少年：停止（奔走終了）（前書き）

奔走少年、今話で最終話です。

奔走少年：停止（奔走終了）

現れた人外の化け物の姿は襠によく似ていた、というより襠に瓜二つである。

「あの両親（バカ二人）は本当に俺たち兄妹の遺伝子で実験してたってわけか……」

人間としての禁に自分達の子供を介入させる、親としてあるまじき業だったが今はそんなこと言ってられない。目の前にいる化け物は地下に存在している同じような化け物を独力で全てほふった規格外なのだ。

しかし、化け物はきよとんとしていた。その場から一切動くことなく興味深そうに少年の顔を覗き込んでいる。

「……遺伝子的なシンパシーでも感じてるのか？」

完全に妹の遺伝子をベースにつくられているであろうその肌の色は灰色だった。体の所々からは突起や棘が飛び出ており触れただけでも重傷は免れないとわかる、だがそんなもの使わなくても万物を殺傷し得るだろうと少年は感じていた。

手足が異常に太く、筋骨隆々としているのだ。ボディービルダー程ではないが明らかに外見よりも内側の筋肉を意識されているとわかる肉付き、無駄がほとんど見当たらない脂肪の薄さや締まっている筋肉の具合は武道の達人を思い起こされる。

しかし、それでも人型をしているが人とは到底思えない異色の存在感。それは圧倒的な支配者が放つそのように少年の体を圧迫していた。

「立ってられねえ……」

体を支えるだけで精一杯、少しでも力を抜いたら気絶するなりで尻から床に座り込んでしまいそうになる。それでも少年がなんとか自我を保てていて化け物と相対できているのは自分の後ろには襠がいるからだった。

自分が後ろに恐れて歩を進めてしまうだけでも、襠に降りかかる危険は増大する。怯えでもしたら簡単に二人とも死んでしまう。そう考えると足に勇氣に似た力が源ぎってくる、負けられないという思いをますます強くする！

「来いや化け物おおお！！！」

勝負はよくも悪くも一瞬で決まる、少年はそう思っている。

二人の間にある実力の差というのは数字などでは表しきれないくらいのものであって少年が負けるとしたら間違いなく瞬殺だろう。

だが、一瞬という意味合いなら少年にも僅かながらだが勝機はある。それは僅かと称するのも憚ってしまうくらいに矮小なものだが少年には最終兵器と称するに値するツルハシがあるのだ。

少年は脇にあるツルハシを掴み、振り上げながら化け物に突っ込ん

でいく。少年に見入っていた化け物はそれを確認してから自らも突っ込んだため反応がかなり遅れた、だがかなりと言ってもそれを時間にして表すと0.2秒にも満たない。瞬きしていたらあっさり過ぎていつてしまうくらいの短さである。

だが戦闘という行為の際に、それはあらゆるスポーツにも通じることだがそもそも隙を見せてしまうということ自体犯してはいけない失態なのだ。誰にでも誰かに怒られた経験はあるだろうがその時に余所見をしていたら確実に怒鳴られる、何か一つのこと集中しなければいけない時に他のことに意識をやってしまったらそれ相応のリスクがかかるのだ。

ましてや、少年は襦に似た化け物が屠ってきたB・O・Wとは明らかに違う。本能的な捕食を試みるために襲いかかるのではなく本気で殺しに来ているのだ、根本的な意味合いで決意も意思も段違いである。

上乗せするように化け物は真剣な相手と交戦していない、経験がないのだ。殺し合いという、命を奪い合う冷たい刃を互いの首筋に当て続けるような緊張感が化け物には皆無なのだ。

もちろん少年の全身には緊張感が満ち溢れている。緊張は研ぎ澄ませるほどに集中力に変わっていく、例え化け物が少年にとつてどれほど想定外の動きを見せたとしても少年は凄まじい実力差をも簡単に覆してみせたことだろう。

少年が真つ当な人間でありながらこんな地獄のような状況でありながら生き延びられたのはそういったずば抜けた集中力があつたからだった。動きが遅いとはいえ大量のゾンビの歯牙から逃れ続けた

のは全速力で走りながらも切っ先三寸の回避が可能な集中力があつたからなのだ。

社会から摘み出され、はじき飛ばされた少年の隠された能力。両親でさえも遺伝子情報からでしか、数字からでしか見ていなかったため分かることなく死別した。

少年本人にもあまり自分に飛び抜けた能力があるなどという自覚はなかった。闇雲に突っ込んだだけ、ツルハシを振り上げながら振り下ろしかかるだけの行為。

ただこれだけ少年に有利な要素があつたとしても、元来二人の間にはどうやっても埋められない深さの溝があることは明白で、少年はこれで勝率を0%から20%に上げた程度。それでもこの大ツルハシを化け物の頭骨にたたき込めれば、さすがにただ事ではすまない。それを含めたら25%、これでようやく4分の1にまで持ち込めたわけだが、その勝率を保つためには『少年の攻撃が先に当たらなければならぬ』という非常に理不尽なくらいに困難な条件が前提となる。

だが少年には曲げられない信念があつた。ただ一人の肉親である妹を守るという使命感に燃えていた。岩をも貫かんとする頑強な精神は自分がアリに見えてしまうくらい強大な敵に躊躇無く飛びかからせた。

「おおおおおおおおおおおおお！！！」

少年の振り下ろされるツルハシ、迫ってくる化け物の手。少年の矮小な体など化け物の小指の先がかすっただけでこの世から消え去っ

てしまうことだろう。それでも少年の動きには攻撃の意思しかなかった、鋭く凶悪な切っ先と化け物の手が交錯する。

ザシュッ！

血と脳漿と灰にまみれた通路にさらに赤色が加わる　バタバタッという血が降り落ちる音が響いて決着を知らせた。

切っ先三寸をギリギリで回避する少年独自の土壇場の集中力は自分のツルハシよりもはるかに早く自分に到達するはずだった攻撃を躲していた。

振り下ろす過程でツルハシを咄嗟に右手に持ち替え　半身になりながらツルハシ自身の重さに任せた超重量級の一撃が　化け物の脳天に炸裂していた。

化け物はそう簡単には地面に倒れ伏さなかった。無表情のまま数秒ほど少年を凝視してから　それから床に倒れ込んだ。

「はあはあはあ……」

怖かったという正直な感想を述べる気力さえ残っていなかった。他から見たら完全なる少年の読み勝ちのように見えるが少年からしたらあの瞬時の動きはただの反射的な行動であっていくつかの偶然が偶然に重なっただけ、ただの奇跡である。

少年はそんな風に余韻に浸っていると化け物の体がまだひくついているのに気づく、少しだけびくつとしたが普通の人間同様に頭部には脳かはわからないが重要な機能があるらしくほとんど虫の息である。だがこのまま放置していたら甦りかねない。

「……うん、殺しておこう」

それに襟が見たらショックを受けかねない、化け物とはいえ自分と瓜二つな顔をしているナニかが目の前で死にかけていたら心中穏やかではないだろう。

少年はツルハシを何度も大きく振り上げては化け物の頭を砕いていく、頭を砕いていく課程で度々化け物の体が跳ね上がったが少年に戸惑いは見られなかった。

頭の原型がなくなつてから今度は肩や足にツルハシ降り下ろす、何度も、何度も。自分達を追いかけてこれないように。

「襦、出てきていいぞ」

襦は出てくると脇目もふらずに少年に抱きついてきた、いきなりのこと少年はかなり驚いたが襦が怖がっていることを察して頭に手を置いた。

「よかった……生きててくれてよかった……」

「死なないよ、襦だけを残して死ねるわけないだろ？」

「でも本当に怖かった……兄貴にもう会えないんじゃないかってずっと不安だった……」

「よしよし、もう大丈夫だからな。もうあとは非常脱出用の電車を見つかるだけだから」

「うん……お化けは？」

お化け、かわいらしい響きに少年は吹き出してしまふ。やっぱりこの状況でも襦は襦だった。

「逃げられた、でも大丈夫だよ。致命傷は負わせたから」

「そう……大丈夫かな？電車とかに襲いかかってこないかな？」

「まあ、大丈夫だろ。フラフラだったし動くのも辛そうだったから」

「ふうん……じゃあ急ごう。これ以上ここにいと鼻がおかしくなっちゃうよ」

「そうだな、早く行こうか」

襦は少年の手を引きながら地図で現在地を確認する、床にある真っ赤な血の痕跡にチラッと視線をやったがたぶんどこか兄が負傷を負わせた際にできたものだろうとあまり気にしなかった。

その痕跡が化け物であるとは、当然気付かなかった。

それから二人は地下鉄にある電車を発見して無難に街から逃げ出した。到着した場所はどこかわからない駅だった。

「廃駅ってやつか……使われてない駅かな？」

「そんなのあるの？」

「あるらしいぜ、ただの都市伝説だと思ってた」

「都市伝説？」

「路線からはずされた駅だよ、ただあるってだけの話だったけど……」

寂れていて、長いこと使われていないのは明白。ぼんやりとした灯りは所々にしかなく薄暗い、とにかく階段を上がるということになって二人で近くの階段を上がった。

「……映画のロケかな？」

「わからない、ただわかってることは俺たちはまだ事件の渦中にいるってことだけだ」

階段を上がったところにあったのはボロボロになっている研究施設

だった。それも二人の家の地下にある研究施設のように荒れ果てていて人の気配さえしなかった。

「……兄貴」

「なんだよ」

「これが地獄ってやつなら大したことないんじゃない？」

「まあ……つい数時間前までもっと酷い状況に置かれていたからな」

「じゃあ、兄貴。頑張って生き延びよう」

「いやあ……さすがに俺は疲れてるんだが……かわいい妹のためだ、もう一肌脱いであげよう」

「ははっ、兄貴とその友達の腕の見せどころじゃない」

「友達か、そろそろやつらの力も借りないとな。さすがにしんどい」

少年はチラッと視界の端に研究員の姿をしたゾンビが入ってくる、どうやら前の場所とは違ってゾンビで散乱しているらしい。

「はあ、また走るわけね」

「外に出てからがもっと走るぞ」

少年はそう言って、カバンから大振りのアーミーナイフを構えて走り出した。

奔走少年
F i n
.

奔走少年：停止（奔走終了）（後書き）

どうも、m a k iです。バイオを久々に書いてけっこう楽しかったです。

これからもこれくらいの長さの話をいくつかあげていこうと思ってますのでこれからもよろしくお願いします。

新シリーズはもうちょっと待ってくださいね（＾・＾）

レフユージア・予告（前書き）

お久しぶりです。かなり長いことほったらかしにしておいてましました

レフュージア：予告

「バカだ、バカが二人いる」

レフュージアはニヤリと笑ってバカ二人をこの世から消し去る、高速の一撃に新たなバカは怯え、その場から逃げる。

「そう、それでいい。そして俺の前に二度と姿を表さなかったらな
おいしい」

レフュージアは気取りながら銃をクルクルと回しながら腰にしまう、その背中を見た者は溢れ出てくる驕りに似た強さを感じたことだろう。それくらいにレフュージアは強いのだ。

「……暇だ」

レフュージアは暇そうに廃墟となっている世界を歩くだけ、下から頑強な体を持ち合わせている彼には壊れた地球を徘徊して回るゾンビなど取るにも足らない存在にもならない。銃など使わなくても素手で十分戦える、そう思っていた。

だが、これよりの数日で彼の価値観は大きく変わってしまう。

自分の力が及ばないこともあるということを知った強者は、真実にどう向き合っただろうか……

レフュージア：予告（後書き）

この話はあくまでも予告であって、本編は作者の気分とかでいくらか内容が変わるかもしれません。

レフュージア：沈黙する世界（前書き）

ここからが本編です

レフュージア：沈黙する世界

レフュージアが世界が混沌としていることに疑いを持つことはない、彼にとって今の世界は自分が生まれてきた頃からこうなっていて、そうであることが当たり前なのだ。そうであることに理由はいらない、どうしてこうなってしまったのかを細かく考えることなど、フランス人に「どうしてあなたはフランス語を話すのですか？」と聞くに等しいとまで思っている。

そんなレフュージアは自分の強さに絶対の自信を持っていた。外を徘徊している死人共に負ける要素など自分にはないと思っていたし、ましてやハンターなどに殺されることもないと思っていたのだ。

実際、レフュージアは強い。人間離れた身体能力は不可能に思えるくらいにアクロバティックな戦闘を可能にしており、レフュージアが戦っている様子はやく「蝶や蜂のようだ」と例えられる。

早く、正確。大量の死人の迫りくる無数の触手のような腕を難なくスルスルツとかわしながらバタフライナイフや銃で的確に死人やハンターを殺傷していく。首を切り落とし、脳みそをぶちまけさせる様子は蝶や蜂というよりもスナイパーと称した方が合っているかもしれない。とにかくレフュージアの強さは人間離れしているということを理解してくればいいのだ。

「……退屈だ」

レフュージアはいつもそう呟いている、いくら死人を淘汰してもレフュージアは自分の心中が常に何かを渴望している感覚を覚えるのだ。その物足りなさつたらない、意味のわからない、大したこと

ない我慢を延々し続けているようなものなのだから真綿でずっと首を絞められているに等しい。

レフユーディアはそんな意味不明な感覚に対して常にイライラしていた。イライラする、とにかくイライラするのだ。レフユーディアはそれを振り払いたいがために刺激を求め続けていた。

「もつと強い相手と戦いたい……」

まるで某人気少年マンガの主人公のような台詞だがそれこそがレフユーディアの本心だった。RPGでもレベル上げなどとかいう理由があったとしても弱いモンスターを倒しているだけではつまらない、多少は倒しがいがある相手と戦いたくなるのは当然のことと言えた。

「……またか……」

レフユーディアの背後数メートル程の位置に何かが近づいてきている、抑えることなく撒き散らしている殺気からして間違いなくハンターである。

「……」

レフユーディアは懐に入っている大振りのナイフを取り出して固く握り込む、それからレフユーディアはいつものようにハンターが自らノコノコと自分の領域に入ってくるまで目を閉じて待つ。

「……」

どうやらこのハンターは用心深いらしい、普通のハンターならば背後から近寄ってくる場合、一っ飛びで相手に襲いかかれる範囲に入

つたらその人間の首など簡単に切り裂くことができる鋭い鉤爪で襲いかかってくるのだが、レフュージアが今背後で相對しているハンターはかなり離れた位置にいるまま動かない。まるでレフュージアを監視しているようだった。

「……………何がしたいんだ？」

どうやらハンターは自らモーションをかけてくる気はないらしい、それを察したレフュージアは首だけを動かして背後の様子を伺ってみた。レフュージアの背後は広い岩場となっていて大きな岩がたくさん、無造作に並んでいる。レフュージアはハンターがどこに隠れているか、正確な位置まではわからないのだがとにかく自分の視界のどこかにいることはなんとなくわかつてはいた。

「……………しまったな」

レフュージアは後悔した。どうやら背後にいるハンターは罠だったらしく、いつまでもモーションをかけてこないハンターに氣をとられている間にレフュージアは自分が囲まれていることに氣付いた。

「まだまだ未熟だな……………退屈の味を覚えるには早すぎる」

物陰から隠すことのできないハンターたちの多量の殺氣が洩れ出ている、おそらくハンターだけではなく様々な種類の化け物がレフュージアの生き血をすすりたいがために取り囲んでいるのだろう。レフュージアは大振りのナイフを鞘にしまいこんで銃を取り出した。ナイフと負けず劣らず大型な銃で、全く同じ型の銃がレフュージアの両手に握られていた。

その銃とは言えない禍々しさを含んだ銃は元々はただの小銃、レフ

ユージアが素人なりにいろいろ調べて改造を加え続けた結果、かなり大きくなってしまった。連射性に優れ、威力も高い。唯一のデメリットは重すぎて使い勝手が悪すぎるということなのだが……基礎的な身体能力がアベレージから外れきってしまったているレフュージアからしたら重さなどあってないようなものだった。

重力を意識して生きる人間などいないように、レフュージアは重鋼のような巨大で凶悪な銃を振り回してしまう。

「……一斉にかかってくる気らしいな」

レフュージアは自分を取り囲んでいるであろう、たくさんのハンターの存在を肌で感じていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7716o/>

BIOHAZARD beSidE

2011年2月25日09時44分発行